

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	渡 邊 春 美
学位授与の要件	学位規則第4条第1・②項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>「関係概念」に基づく高等学校古典教育の研究</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 吉 田 裕 久</p> <p>審査委員 教 授 田 中 宏 幸</p> <p>審査委員 教 授 竹 村 信 治</p> <p>審査委員 教 授 山 元 隆 春</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、高等学校における古典の授業に対して興味・関心を持たない学習者が増加し、古典離れ・古典嫌いになっているという実態に対して、「関係概念」としての古典観に基づく古典教育の理論化を図るとともに、高等学校古典教育の改善に資することを目的にして、(1) 古典観、(2) 古典教育観、(3) 学習者の主体的な読みの過程、(4) 教材の開発・選定・編成、指導法、(5) 「関係概念」に基づく古典教育の構想、これら5つの観点から取り組んだものである。</p> <p>本論文は、序章・結章を含めて、8章で構成されている。</p> <p>序章では、研究の目的と意義、課題と方法が述べられている。</p> <p>第1章「古典教育論の展開—「典型概念」から「関係概念」に基づく古典教育へ—」では、増淵恒吉・西尾実・荒木繁・時枝誠記・益田勝実・西郷竹彦、戦後の古典教育をリードしてきた6人の先行理論の検討を経て、古典観は「典型概念」としての古典観(典型、範型としての古典を学習者に教え与えること)から「関係概念」としての古典観(学習者が、古典との対話を通して、創造的に読み、新たな価値を発見する)に比重が移りつつあるととらえ、それに従って、古典教育も、読解的方法から古典との対話による価値の創造へと向かってきたと論述している。そして、その転換は、昭和40年代に始まり、平成初期の読者論研究、古典(カノン)化の研究、学習理論研究などのパラダイム転換を経て、今後の古典教育の可能性を拓くものと位置づけている。</p> <p>第2章「「関係概念」に基づく古典教育の基礎」では、「関係概念」に基づく古典教育は、自立した学習者を求め、そのためには古典を読む力の育成が必要になるとして、古典を読む力を知識・技能・態度に分けてとらえている。そして、その古典教育の方法として、a. 読むことの観点提示と読む技能の習得、b. 問題意識の喚起と追求、c. 追求の焦点化、d. 形象化と意味付け、e. 主体的学習と交流による追求、f. 内化を見出すことができるとし、授業はこれらを複合的かつ有機的に取り入れて構成する必要があると指摘している。</p> <p>第3章「古典教育史における学習者の定位」では、学習者を正當に位置づける授業構造なく</p>			

して学習者主体の授業にはなりえないとし、古典との関係性を築き、内化を促進するために、学習者の問題意識に着目して、学習者を主体的な読み手として位置づけ、学習者と古典との対話を通して創造的に読み、〈古典〉を内化する古典教育を追究している。

第4章「古典の教材研究と開発・選定・編成」では、「関係概念」としての古典観に基づくとき、教材は、学習者が主体的に働きかけ、創造的な読み（読解→解釈→批評）によって価値を見出すことをとおして現代を生き抜く糧を得る可能性を持つものでなければならないとし、そのためには学習者にとって価値ある主題に統合される教材開発が必要であり、これを(1)情意的観点、(2)価値的観点、(3)技能育成的観点、(4)方法論的観点、以上4つの観点に留意して行うべきであると述べている。

第5章「古典教育実践の検討―「関係概念」に基づく古典教育の観点から―」では、加藤宏文・片桐啓恵・北川真一郎・牧本千雅子の実践事例を「関係概念」に基づく古典教育の観点から分析・考察し、古典の創造的読みを成立させる要件として、①問題意識、②対話と多声、③モデル（道具）、④メタ認知を導出している。

第6章「「関係概念」に基づく高等学校古典教育の構想」では、第1章から第5章までの考察を基に、高等学校第1学年から第3学年までの古典教育のカリキュラム、読みの能力表を作成して、第1学年―単元『伊勢物語』―生き方としての「みやび」を問う―、第2学年―単元「無常の世を生きる―方丈記・徒然草―」、第3学年―単元「歴史を生きた人々―『大鏡』―と、学年ごとの具体的な授業構想を提示している。

結章「研究のまとめ」では、本研究の成果として、(1)学習者の主体的学びの促進、(2)学習者の古典を読む力の育成、(3)古典教育方法の開発、(4)教材の開発・編成による主体的学び、(5)主体的文学体験、(6)創造的読みによる古典の内化の6点を挙げてまとめとしている。

本論文の意義は、次の3点に見いだされる。

- (1) 戦後高等学校古典教育の発展過程を史的に考察し、古典観は、「典型概念」としての古典観から、「関係概念」としての古典観に移りつつあることを指摘している。
- (2) これまでの高等学校の古典教育が「典型概念」に基づく硬直化したものであったことから、「関係概念」に基づく古典教育にシフトすることを通して、高等学校古典教育を改善しようとした。
- (3) 「関係概念」に基づく古典教育論を、理論面だけでなく具体的に古典授業として構想し、高等学校古典授業の実際例として提示している。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成27年2月12日